

# ウィーンミュージアム・クォーター 「MITSUKO—舞踏による愛の物語」

「MITSUKO—舞踏による愛の物語」公演

ウィーンミュージアム・クォーター、2014年6月27日

京都の桧垣バレエ団によるウィーン公演は一日限りだった。ミュージアム・クォーター、ホール E の舞台での公演は、オーストリアでは初演となる特別な作品、「Mitsuko」、事実に基づく愛の物語である。19世紀末の日本、オーストリアの外交官ハインリヒ・クーデンホーフ＝カレルギーは、まだ非常に若かった青山光子と知り合い、彼女を好きになる。ふたりは結婚し、ヨーロッパに戻り、オーストリア＝ハンガリー帝国で暮らす。だが、ハインリヒは若くして突然死に見舞われる。未亡人となった光子は悲しみのうちにひとり取り残される。というのも7人の子供たちはヨーロッパの生活に慣れ、光子が日本の伝統を守ろうとしても全く理解しなかったからである。だから光子は、終盤のシーンで、もう一度愛する夫と一緒にいることを夢見るのである。

小西裕紀子のタイトル・ロールははまり役。円熟の域に達したこのアーティストは、非常に説得力のある役作りを行った。一見繊細な磁器製の人形のようなだが、初めてハインリヒと出会った若き日の光子も、そして後に妻となり母となった光子の、愛する夫と死に別れた悲しみばかりか、ヨーロッパで育った子供たちにとって日本の伝統を守ることは重要ではないという苦い思いも見事に表現した。小西は、1986年に桧垣美世子によって設立されたバレエ団のプリマバレリーナだが、これまで多くの作品の振付も行ってきた。1998年初演の2幕のバレエ「Mitsuko」もそのひとつ。彼女はこの作品で、きわめて詩情豊かかつきめ細やかな、敬意をこめたふたつの文化の調和、両文化の正しい評価に見事成功している。そのためには、トードダンスを含む古典的なバレエのステップの素材に、「舞一踊り」、つまり天皇を中心に栄えた京都文化の舞踏様式の要素も取り入れた。音楽では、ヨーロッパ音楽、特にドミートリイ・ショスタコーヴィチの作品と、篠笛と呼ばれる横笛、すなわち伝統的な竹製の管楽器で演奏される日本の音楽（録音）を使い分けている。舞台装置のほとんどない舞台上、舞台後方のパネルに投影された非常に立体的に見える映像だけが、それぞれの場所、たとえば日本の茶室や、ウィーンの舞踏会用ホールなどを暗示する。

小西裕紀子のほかに、**佐々木大**（男性的で、愛に燃えるハインリヒ役）、愛らしい女将役の**前田翼**、跳躍の素晴らしい外交官役の**榎本心**、**西島明宏**、**今井大輔**、**和田健太郎**、「奴（やっこ）さん」（座敷芸）の**河波佐結里**、**末原雅広**、そして魅力的な若いバレリーナたちの好演が、この1日限りの公演を盛り上げた。

日本では光子の人物と生涯はよく知られており、この公演には日本人観客も非常に多かったが、客席には、ジャーナリストで著作もある光子の孫娘、バーバラ・クーデンホーフ＝カレルギーがバレエで表現された祖父母のロマンスを鑑賞する姿も見られた。バレエ団に対し、また思いのこもった舞踏による物語に対し盛大な拍手が送られた。

イーラ・ヴェルゴウスキー